

集会につぐ集会

これでもって、われわれははじめて、きまりきった普通の政党のわくから遠くへ踏み出たのだった。人々はもはやいまでは、われわれを無視して通ることができなくなつた。この集会の成功がたんにかげろうのようなものであるという印象を与えないために、わたしはただちにツイルクスでの第二回示威大会を次週にきめた。そして成功は同じだった。この大会場はふたたび破れんばかりに大衆で埋つた。そこでわたしは、次週には同じ形式で第三回の集会を開こうと決意した。そして第三回目には巨大なツイルクスは上から下まで人でいっぱい、すしづめだった。

この一九二一年の開始以後、わたしはミュンヘンでの集会活動をますます高めたのだった。わたしは、いまやさらに、単に毎週一回でなく、往々にして週二回の大衆集会を開催し、そのうえに、夏の盛りや秋の終りごろには、しばしば週三回にもなった。いまではわれわれはいつもツイルクスで集会をした。そしてわれわれの集会の晩はいつも同じような成功をおさめた、と満足して確認することができたのだった。

その成果は、運動の支持者数が増加したことであり、党員の数が増加したことであった。

*

むなししい強制解散の試み

もちろん、こうした成功はまたわれわれの敵を安心せしめてはおかなかつた。かれらはあるいはテロで、あるいは黙殺でと、いつも戦術が動揺していたので――

かれら自身認めねばならないのだが――どういう方法でもそれは、われわれの運動の発展を阻止することができなかったのである。そこでかれらは最後の努力として、われわれの今後の集会活動に、それによって究極的にとどめをさすように、テロ行為を決意したのであった。

この行為の外面的理由として、人々はエアハルト・アウアーという州議員に対するこのうえなくなぞにみちた暗殺計画を利用した。上述のエアハルト・アウアーがある晩なものかに撃たれたというのである。すなわち、かれは実際に射殺されたのではないが、かれを射殺しようとしたものがあつたというのだ。だが社会民主党指導者のウソのような沈着さと、なぞのような勇氣は、不法な攻撃を失敗させただけでなく、この極悪な犯人自身がひきょうにも逃げるのをたたくのめした、というのだ。かれらは、警察もその後かれらについてもはやすこしの足取りもつかむことができないほど早く、遠くへ逃げてしまったという。このなぞにみちた事件を利用して、ミュンヘンの社会民主党の機関紙は、われわれの運動に対してこのうえなく過激に扇動し、同時に古くから習慣になつておしやべりで、次に起るにちがいないものをほのめかすのだった。われわれの木が天に達するまで成長しないよう、プロレタリアのこぶしでいまや適当なときに干渉するよう配慮せられてゐる、というのだ。

その数日後、はやくも干渉の日がやつてきた。

ミュンヘンのホーフプロイハウスのフェストザールでの集会――わたし自身がそこで話すことになつていたのでが――が、究極的な対決のために選ばれたのだった。

一九二一年十一月四日、午後六時と七時の間に、わたしははじめて実際の報告をうけとつた。

T12行

1874.12.21
—1925.3.20
SPD
1874.12.21
1925.3.20

それはこの集會が無条件に強制解散をさせられるだろう、そしてこの目的のために特に若干の赤の工場から多数の労働者大衆を集會に送るくわだてがある、というのだった。

われわれがこの情報をもつと早くうけとらなかつたことは、ある不幸な偶然のためであつた。われわれはその日にミュンヘンのシユテルンエツカー街の神聖な旧事務所を去つて、新しい事務所へ引越したのだつた。すなわち、われわれは旧事務所からは出たが、新しい事務所がまだ手入れがしてなかつたので、はいれなかつたのだ。また電話は旧事務所からとりはずしたが、新事務所にはまだ取りつけられていなかつたので、この日に強制解散をくろんでいると伝える多数の電話が、みんな通じなかつたのだ。

この結果、集會自体が非常にわずかの整理隊だけで守られるということになつた。おおよそ四十六人からなる数的にあまり強くない百人隊がいただけである。だが夕方一時間のうちに多くの増援軍を集めるためには、警急機構はまだできていなかつた。さらに、こういう気づかむしいわさは、いままでなん度もわれわれの耳に達していたし、そのうえ特に何事も起らなかつたということがあつた。通告された革命はたいてい起らないという古くからの格言は、われわれの場合にもいままでいつも正しい、ということを実証していた。

このうえもなく残酷な決断でもつて強制解散に対抗するためにその日にやりえたことをみんな、こういう理由でおそらくやらなかつたのである。

ついにわれわれは、ミュンヘンのホーフプロイハウスのフェストザールを、強制解散には適していないように思える、と考へていた。われわれはもつと大きい講堂、特にツイルクスに対して

もつと強制解散を恐れていたのだ。そのかぎりにおいて、われわれはこの日貴重な教訓をえた。

われわれはその後のこの問題をすべて——わたしはあえていうのだが——科学的方法で研究し、いろいろの結論に達した。それは一部分は興味深くまた信じがたいものであつた。そしてその後われわれの突撃隊を有機的、戰術的に管理するために根本的に重要であつた。

七時四十五分、わたしがホーフプロイハウスの玄関についたとき、たしかにそういう企図があることについて、もはや疑うことができなかった。講堂は満員だつた。だから警察が入場を阻止してゐた。非常に早くからきていた敵は、講堂の中におり、われわれ支持者は大部分外にいた。小人数の突撃隊が玄関でわたしを待っていた。わたしは大講堂の入口を閉じさせ、そして四十五人にはいるよう命じた。わたしは若者たちに次のように説明した。おそらく今日はじめてのるかそるか、運動に忠誠をつくさねばならないだろう。そして殺されてわれわれにかつぎ出されなにかぎり、われわれの中の一人といへども講堂を去つてはならない。わたし自身も講堂に残るつもりであり、この中の一人といへどもわたしを一人にして去らないだろうと信じている。だが一人でもひきようであることを実証したのを見たならば、わたしはみずからその腕章をとりさり、黨員章をとりあげるだろう、と。さらにわたしはかれらに、強制解散のちよつとしたきざしでもみたらただちに前へ進め、攻撃することこそ最良の防衛だということを忘れるべきでない、と命じた。

ハイル三唱——今日はいつともより荒々しくしゃがれて響いた——が、答へであつた。

それからわたしは講堂にはいり、実際に自分の目で様子を見渡すことができた。かれらはぎっ

しりと内部で席を占め、すでに目でわたしをにらみ抜こうとしていた。無数の顔が憎悪にみちてわたしに向かっていた。その間他方では悪意のあるしかめ面で、非常にはつきりしたヤジをくりかえしとばしていた。人々はそのうえに、今日は「われわれが結末をつけるぞ」、臍腹に注意しろ、永久に口に栓をしてやるぞ、とこういう美しい空語をまた叫んでいた。かれらは自分たちの優勢を知っており、したがって優越感をもっていたのだ。

それにもかかわらず集会は開くことができた。そしてわたしはしゃべり始めた。わたしはホーフロイハウスのフェストザールではいつも講堂の長いほうの前面に立っていた。そしてわたしの演壇はビールのテーブルだった。わたしはこうしてもともと、人々のまんな中にいたのだ。この講堂では、わたしがその他の場所では決して同じようにはみられない気分をいつも生ぜしめていたのは、まさしくこういう状態が寄与していたのかも知れなかった。

わたしの前、特にわたしの左前方には、敵ばかりがすわったり立ったりしていた。それら大部分はマファイ工場や、グスターマンやイザリアツエーラー工場等からきた、みんな非常にたくましい男や若者だった。左側の講堂の壁にそって、かれらはまったくぎっしりとほとんどわたしのテーブルのところまで押しだしてきていて、そこでジョッキを集めはじめた。つまりかれらは、どしどしビールを注文し、空になったジョッキをテーブルの下においたのだ。全砲列はかくして成立した。今日もことがもう一度うまくはこんだなら、驚きだろう。

約一時間半後には——わたしはいろいろのヤジにもかかわらずそんなに長くしゃべったのだが、ほとんどわたしはあたかも状勢を支配したかのようであった。強制解散隊の指導者自身も

またこれを感じたらしかった。というのは、かれらはだんだん落ちつかなくなってきた、なん度も行ったりきたりし、目に見えて神経質に仲間たちを励ましていたからである。

わたしはあるヤジを受けながすとき、ちょっとした心理的な失敗を犯した。そのことばが口から出るか出ないかのうちに、わたし自身気がついたのだが、それが戦端を開く合図を与えた。

二、三の怒ったヤジ。そして一人の男がとつぜんいすの上におどりあがり、講堂の中へどなった。「自由だ!」。この合図に自由の闘士たちは自分たちの仕事を始めた。

数秒にして会場全体は、わめき絶叫する人の群でいっぱいになった。その上を無数のジョッキが榴弾砲の射撃のように飛ぶ。その間に椅子の脚のめりめりつと折れる音、ジョッキのわれる音、どら声で叫ぶ、わめく、叫ぶ。

バカげた光景だった。

わたしは自分の場所であつたままであり、わたしの若者が完全にかれらの義務をいかに遂行するかを観察することができた。

そこでわたしはブルジョア集会を見ていけばいいのだった!

立ち回りが始まるか始まらないかに、早くもわたしの突撃隊員——というのかかれらはこの日からそう呼ばれた——は攻撃していった。おおかみのようにかかれらは八人か十人の群をなして、どしどし敵の中へ突進していった。そしてかれらは実際にだんだんと講堂からたたき出しはじめた。五分もたつと、もはやわたしはかれらのうちの一人といえども、まだ血まみれになっていないものをまったく見ることができなかつた。そのときはじめてわたしがほんとうに知った人が、

いかにたくさんいたことか。先頭にわたしの勇敢なマリウス、今日のわたしの個人秘書ヘス、その他たくさんの方が、すでに重傷をうけながら、両足で立っていることができるかぎり、幾度も幾度も攻撃する。二十分間大騒動が続いた。だがさらに、おそらくは七、八百人を数えた敵は、五十人にみたぬわが方の人間によって大部分講堂からたたき出され、階段から追いたてられた。ただ講堂の左うしろの隅に、まだ大きな群がもちこたえていて、最も激しく抵抗をしていた。とつぜん会場の入口から演壇に向けて二発のピストルを発射した。そこで乱射がはじまった。昔の戦争のでき事のこういう再生に直面して、ふたたび心は歓喜せんばかりであった。

だれが撃ったか、そこからはもう見わけがつかなかった。ただひとつ確認できたのは、その瞬間から血みどろになつたわれわれの若者の憤怒がいちじろしく激しくなり、ついに最後の妨害者を圧倒し、講堂から追い出してしまったことだけだった。

「集会は続行する」 おおよそ二十五分たっていた。講堂自体は、ちようど榴弾が破壊したかのように思われた。われわれの支持者の多くは、まさしく包帯でおおわれていた。他のものは車で運ばれねばならなかった。だがわれわれはいぜんとしてこの場の支配者であった。この晩の集会を司会していたヘルマン・エッサーが宣言した。「集会は続けられます。報告者が登言します」と。そこでわたしはふたたびしゃべった。

われわれが集会を閉じたあと、とつぜん興奮した警部が飛びこんできて、腕をふりまわして講堂の中へわめきちらした。「集会は解散だ」

わたしは知らず知らず、このおくれればせのき事を笑わずにはおられなかった。まことに警察らしいもつたいぶりだ。かれらが小さければ小さいだけ、少なくともそれだけかれらは大きく見せかけねばならないのだ。

われわれはその晩、実に多くのものを学んだ。そしてまたわれわれの敵も、自分たちの側で受けた教訓をもちや忘れなかった。

それ以来一九二三年秋まで「ミュンヘンの郵便」は、もはやプロレタリアートの鉄拳を知らせてこなかった。